
oni-oni

鬼平 鬼平

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

oni-oni

【Nコード】

N8972V

【作者名】

鬼平 鬼平

【あらすじ】

片蔵零時は17歳の高校生。彼はとある事象に関わったため非日常な生活に取り込まれる。

ブローグツ―か説明（前書き）

ブローグはやや突発的に書いたからご容赦ください。

ブローグツークが説明

ある日、僕は鬼になった。

世間一般でいう角を生やした鬼ではなく、古くから人間にまぎれて人間の様に装ってきた鬼だ。

彼らは、人間に自分の血液を流し込むことにより数を増やしてきた。彼らの目的は「正義の味方」である。彼らは「正鬼師団」と名乗り、ある時は仕事を請け、ある時は自分で危機を察知して人間を護ってきた。

人類の危機とは我々の知らない所で日夜起こっている。「正鬼師団」の仕事はソレらが人類に接触する前にどんな事象であつても、潰すことだ。だが稀に、少数の人間がその事象に接触してしまうことがある。その者は、鬼達によって鬼にされるのだ。

ブローグツ―が説明（後書き）

こついの書くの初めてだからブローグのみ掲載。後の話はまとめてからですな。

第一話「知らない天井」

目が覚めた先にあつたのは壁だった。ていうか天井だった。自宅の天井にしては白い、そう例えるなら病院の様な天井。なぜ…？

なぜ僕は病院（のような場所）に横たわっているのだ？気が動転して僕は勢いよく起き上がった。ガチャリとありきたりなドアの音がした。

入ってきたのは人形のような若いメイドだった。そのメイドさんは人間味がなく、僕が起き上がるのを待っていた様な感じで気味が悪かった。

「マスターがお呼びです」メイドが感情のこもってないような口ぶりで言った。

「え？マスター…？」日常生活ではゲームの中くらいでしか聞かない様な単語に僕は耳を疑った。

「マスターがお呼びです」メイドが先ほどと同じ様な調子で呟いた。「ここはど『マスターがお呼びです』こですか？」有無は言わせずマスターに会わせるつもりか？ここでねばっても仕方ない。

「分かりました」と言いベッドから降りた。ん？ベッド？僕はベッドに寝ていたみたいだった。

「付いてきてください」メイドは無表情で言いゆつたりと歩き出した。随分とマスターがお呼びですを連呼してるものだから急ぎの用かと思っていたから少し拍子抜けした。だが、僕はそんなことは指摘せずになだ黙々と無愛想なメイドの後に続いた。

しばらく歩くと荘厳な扉があつた。メイドはその扉の前に立ち、「マスター、片蔵零時をお連れしました」と言い中に入っていた。僕はもうなにがあっても驚かないぞと思いメイドの後に続いた。

結果、僕は驚いた。マスターなんていう大層な呼び名でメイドに呼ばせている奴なんて偏屈なジジイか恰幅の良いジジイばかりだと思っていた。だが、そいつは僕と同じくらいの年の少年だった。身長は僕よりも先ほどのメイドよりも低い。容姿は眼鏡をかけているくらいしかこれといって特徴はなかった。そいつはおもむろの口を開き、「ああー君が片蔵零時だな。初めまして、俺は須藤数気だすとうかずきよろしく」と言った。

僕はあまりのそいつの態度に思考停止していたが、とりあえず聞きたかったことを口にした「そのメイドさんのスリーサじゃなくてここはどこですか？」

「ここは四次元空間だよ」

「よし…へ？」

「四次元空間だよ、異次元とも言う。俺が便宜上四次元空間と呼んでいる」

僕は絶句した。須藤数気は続ける「まずは我々の組織のことを説明しよう」と…。

僕の聞いたことを要約すると彼らは「正鬼師団」という組織であるということ、組織の目的は人類の危機を潰すことである。

「じゃあなんで僕はここにいますか？」

「君は、俺たちが潰す前の人類の危機に偶然行き会ってしまったんだ。君にもわずかに記憶が残っているはずだ」

確かに怪しい人物を追った記憶がある。それが人類の危機だったのか？

「君には俺らの仲間になってもらうよ」

「え？」

「人類の危機のことは人類に漏らす訳にはいかないんだよ」

「え？でも、僕、普通の人間ですし」

「何言ってるんだい？君はもう人間じゃないよ 鬼だ！」

「お…に…？」

「そう！鬼！人類の危機から人類を護る人外の組織だ！」

「でも、僕の頭には角なんか生えてないですよ？」

「君の血はもう鬼の血に変異してるんだ。掌を見てごらん！」

僕は彼に言われた通り掌を見てみた。そこには黒字で大きく「鬼」書かれていた。

「なっなんですか？これは？」

「鬼の証だよ君！我々にしか見えない。人類には決して見えない鬼の証さ！」

糞っもう逃げられないってことか？

「君は運がなかっただけさ！ようこそ正鬼師団へ！」須藤は叫んだ。

第一話「知らない天井」(後書き)

どうですか？

第二話「談話室」

「片蔵くんよぉ〜そういうことだからさ。君は鬼ね」

「はぁ」

正直いつてまるで頭がついていっていなかった。鬼？なんじゃそりや？

「あのメイドさんの名前はなんですか？」

「零だよ、片蔵くんよぉ」

「零ですか…良い名前ですね」と僕は適当に相づち打っておいた。僕の方から聞いたが別に興味があつたわけじゃなく早くこの非現実的な話に幕を降ろしたかった。

「片蔵くん、これから談話室行くよ？」

「？談話室？」

「そう、新メンバー増えるってみんなに言っておいたからさぁ。君を紹介しに」

マズいな。非常にマズい。これじゃ逃げられない。

「まさかさぁ 片蔵くんさぁ 逃げようなんて考えてないよね？」

いつの間にか僕の喉元に日本刀が添えられていた。須藤の動きが全然見えなかった。

「まさか！そんなわけじゃないですか！ささっ早く談話室に行きましょう」

「素直で結構だ。大体他の奴はこの辺一悶着あるんだけどな」

駄目だ。逃げたら殺られる。

「その場合どうなるんですか？」

「死ぬ程痛いけど死ねないんだ。俺らは人間よりも吸血鬼よりも丈夫な生き物でさぁ。たとえ首をもがれたって死なねえんだよ 痛いけど」

ひえええええ

「さて、談話室へ行こう。俺は先に行ってるから、後から零と来て

くれ じゃまた」

そういうと須藤は消えた。

「消えたあああ」

「鬼走きそうというんです、私たち鬼ができる人間には真似できない走り方です」

「え？ 零さんも鬼？」

「当然でしょう？」

そういうと彼女は僕の方を時々振り返りながら進み始めた。

談話室は騒がしかった。零さんはドアをノックし、「マスターお連れしました」といい入っていった。僕も後に続いた。

「おお片蔵くん！ 来たか！」

部屋には須藤を含め5人の男女がいた。

「皆の衆！ 彼が新メンバーの片蔵零時くんだ！」

「「「よろしく」」」

「「「よろしくお願いします」」」

みんな素っ気ねえな。

「じゃあ自己紹介しようぜ！ 皆の衆！」

さつきよりテンションの高い須藤が言った。

「俺はさつきも言ったが須藤数気！ ここ東京支部の支部長だ」

支部長だったのか。道理でえらそうだな。

「須藤零です。支部長補佐です」

メイドの零さんだ。支部長と同じ名字？

「長井鞘だ！ よろしくな」

ポニーテイルの女剣士みたいな奴だ。

「長井刀です。鞘とは双子です。よろしく」

似てない双子だな。

「小佐内旬だ。副支部長だ」

須藤より何歳か年上だよなあ

「今日集まってるのはこれくらいだな！ あと10人くらいいるけど」

ここまでで分かったことは長井刀は僕の好みだな。ショートカットで眼鏡とか僕得過ぎるわぁ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8972v/>

oni-oni

2011年10月9日14時52分発行